JAILA JOURNAL 第 6 号
（2020 年 3 月）

ディスカバリー・ラーニング（発見学修）
―UCバークレー学士課程教育の試みを中心に―
Discovery Learning:
Focusing on UC Berkeley Undergraduate Education

長野 公則 （Kiminori NAGANO）

国際公認投資アナリスト *Certified International Investment Analyst*
博士（教育学・東京大学）*Ph.D. in Higher Education from the University of Tokyo*

Abstract

Academic Enrichment Programs have been continuously introduced at UC Berkeley campus (UC Berkeley) from 2004 to the recent years. Those programs were designed to give challenging opportunities for undergraduate students.

"Discovery Learning" is a new campus wide challenging approach at UC Berkeley to give new opportunities that students can learn through both inside and outside of the formal curriculum. The task force headed by Executive Vice Chancellor and Provost with Vice Chancellor of Undergraduate Education commissioned a discovery survey to better understand how each academic unit currently defines the "Discovery Learning" that leads to cumulative discovery experience for its undergraduate students. In the survey, the "Discovery Learning" has four types: Research, Creative work, Community engagement/field studies, and Entrepreneurship experiences.

This paper focuses on the "Discovery Learning" started from 2018 at UC Berkeley. This paper reviews the discovery survey and then searches similar new trials at their peer institutions. The purpose of this paper is to review those new trials in the United States and to find some suggestions for undergraduate education.

1. はじめに

カリフォルニア大学・バークレー校では、学士課程教育における先進的な試みが、アカデミック・エンリッチメント・プログラムとして 2004 年ごろから順次導入されて来た。（1）これまでの常識と違うものに出会う驚きを与えること、（2）多角的観点からの学際的アプローチ、（3）現代がかかえる新しい問題への解決志向、（4）教員と学生が相互に知的に刺激しあうことがエンリッチメント・プログラムの特色であったと指摘することができる。しかし、これらのプログラムは、選択科目や特

別な取り組みでの新しい学生体験を積み重ねることを目的とするもので、必ずしも全学的に統一した試みを意図するものではなかった。

2017 年 8 月にバークレーに就任した Carol Christ 学長は、学生の成長を重点課題の一つにあげた。大規模研究大学である UC バークレーでは、学士課程学生を発見的経験に導くディスカバリー・ラーニングという全学的統一概念を掲げる前提として学部や専攻分野での実情を調査する必要を認識し、副学長兼プロボスト他のタスクフォースが 2017 年から学内調査を開始した。ディスカバリー・ラーニングは、学士課程研究（Research）、創造的発表(Creative work)、地域・フィールド参画（Community engagement/field studies)、アントレプレナー(Entrepreneurial)の 4 形態と定義された。本稿では、2018 年 8 月に公表された UC バークレーの全学的調査 *"The Arc of Discovery in the Undergraduate Curriculum"* を主たる資料としてディスカバリー・ラーニングを分析し、更にピア・グループ校での同様の動きを検討することを通じて、今後求められる学士課程教育の特色について考察する。

2. 本稿の目的

本稿の目的は、カリフォルニア大学・バークレー校が新しく取り組みつつあるディスカバリー・ラーニングを事例としてとりあげ、その定義、背景、内容、ピア・グループ校での同様の動きを検討することを通じて、今後求められる学士課程教育の特色について論じ、今後の改革に向けての示唆を探ることである。

3. 先行研究

3.1 アメリカの学士課程教育

アメリカの学士課程教育に関連しては、多くの先行研究がある。ハーバード大学の学長であった Derek C. Bok は、その 1986 年の著書 Higher Learning (Bok, 1986)の中で学士課程教育における教養教育の最も広く共通する目的として次のように述べている[1]。

「学士課程学生は、十分な知識を習得すべきである。その学修は、特定の分野に集中することによる深さといくつかの異なる学問分野に専心する幅広さとの両面を備えていなければならない。学生は正確にまた様式にのっとって意志疎通を図ることができ、統計的な数量処理を行う技術を身につけ、少なくとも一つの外国語に通じ、明確かつクリティカルに思考することができる能力を獲得しなければならない。学生はまた自然、社会、我々自身についての知識と理解を得ることができる問う力と思考する力にかかわる重要な方法を身につけなければならない。異なる価値観、伝統、制度を持つ異文化について理解を深めなければならない。多くの機会を体験することによって、永続する知的、文化的興味を持ち、自己を知り、そして最終的には将来の生活とキャリアのしっかりした選択ができなければならない。多種多様な学生仲間と共に働き共に生活することを通じて、より大きな社会性を養い、人間の多様性に対する耐久力を身につけなければならない。最後に、といっても優先順位が最後ということではないが、学生たちは学生時代そのものを楽しまなければならない。少なくとも、後に学生時代を振り返ってみたときに、興味あるものに取り組んだことや情熱を

注いだ時代として、特に忘れ難く思い起こされるような過ごし方をしなければならない」。

この目的の中のどこに重点が置かれるかは、時代の要請、大学の規模、ミッション、伝統等に応じて多様である。アメリカの 50 近くのリベラルアーツ・カレッジが参加している長期的実践的共同研究に Wabash National Study of Liberal Arts Education2006-2009 がある。ラーニングアウトカムとそれを生み出す諸要素に関する研究の中心であるこの Wabash College のリベラルアーツセンターは、リベラルアーツ教育を支えるために不可欠な 3 要素を次のように定義している(Blaich et al., 2004)。（1）職業技術よりも知的教養の開発により大きな価値をおくことについて大学全体のエートス[2]と伝統が存在すること。（2）学生の知的経験において、カリキュラムとキャンパス環境の構造が相互に関連して首尾一貫性と統合性を有していること。（3）「学生と学生」及び「学生と教員」の教室内外での相互研鑽に強い価値を置くことについて大学全体のエートスと伝統が存在すること[3]。近年、これらの 3 要素に加えて Tim (2018)は、インターンシップ、シビック・エンゲージメント、学士課程での研究を重視し、体験型リベラルアーツが高等教育を変えると述べている。デジタル革命がリベラル教育に与える影響については Hartley (2017)等がある。

以上は主として私立大学における例であるが、州立大学においてはその公共的性格から、一般に学生の属性は多様でまた学生数も大規模であることが多く、私立の研究大学やリベラルアーツ・カレッジとは異なる困難さがある。また Rothblatt (2016)では、現代のアメリカの公教育における人文学とリベラル教育の新しい在り方について論じている。

日本でもアメリカの学士課程教育について、多くの先行研究がある。吉田（1999）は幅広さと一貫性の葛藤の観点からアメリカにおける一般教育の構造を論じている。絹川（2005）はリベラル教育と学士学位プログラムについて詳しく論じている。江原（2006）はアメリカの学士課程教育の歴史的変遷を踏まえて改革の方向性を探っている。福留（2013）はカリフォルニア大学のプログラムレビューを通してアメリカの大学における内部質保証を支える仕組みについて考察している。溝上（2014）は、教授の授業を一方的に聴く授業形態ではなく、学生が能動的に発表等を行うアクティブラーニングについて論じている。更に近年学生の多様性が高まるに連れ、アカデミック・アドバイジングの重要性が増している。既にこの点について清水（2015）はアメリカのアカデミック・アドバイジングについて詳しく論じている。大西（2018）も、ダートマス大学、パデュー大学、カリフォルニア大学バークレー校の３校で、アカデミック・アドバイジングの重要性がかってないほど高まっていると論じている。大西（2018）は、またカリフォルニア大学バークレー校のリベラル教育は、伝統的な方法論を信奉するあまり、少人数教育が徹底されない現実とのギャップに悩んだ結果、より効率的で現代的な内容のカリキュラムに刷新・脱皮するための大きな改革の途上にあるとしている。

これらの先行研究は、アメリカの学士課程教育の様々な葛藤とこれを克服する試みをそれぞれの観点から論じたものであるが、学生の体験としての新しい発見を軸に論じたものではない。本稿は大規模州立研究大学における最も新しい動きの一つであるディスカバリー・ラーニングの試みに焦点を当てるものである。

4. カリフォルニア大学バークレー校のディカバリー・ラーニング

4.1 ディスカバリー・ラーニングの定義

2018年8月に、UCバークレーにおいて*The Arc of Discovery in the Undergraduate Curriculum*と題する学内調査の報告書が公表された。これは2017年から実施されたディスカバリー・ラーニングに関する全学調査の報告書である。この調査では、各学部がそれぞれの学位プログラムにおいて「何が発見学修に該当するか」を回答するように求められた。各学部特有の発見学修の定義に到達しやすいように、調査では発見学修の4つの標準的類型を特定した。

（1） 学士課程研究（Research）：新事実、理論、応用を発見または修正する系統的な探求、研究
（2） 創造的発表（Creative work）：ビジュアル、演劇、映画、文学、建築、デザイン等の創造
（3） 地域・フィールド参画（Community engagement/field studies）：大学外のコミュニティーとの連携活動、社会問題への対応活動、授業で獲得した知識のフィールドでの適用
（4） アントレプレナー(Entrepreneurial)：起業、研究の商業化、スタートアップのサポートにおいて学生のイノベーションを支援する企業的体験

この全学一斉調査の実施に至った背景について述べたうえで、結果の分析を行う。

4.2 ディスカバリー・ラーニングの背景

約3万人の学士課程学生を擁する大規模大学であるUCバークレーでは、リベラルアーツ・カレッジのような少人数教育は難しく、学生に対するきめ細かな指導は不足しがちであった。2014年秋からThe Berkeley Undergraduate Initiativeと呼ばれる学士課程改革が実施された。具体的な改革案の一つとしてアカデミック・アドバイジングの充実が図られた。新入生へのオリエンテーションの充実に加え、専門化した機能分担アドバイジング（学生の心身健康、学修、就職、転学等）の充実が図られた。2017年8月に就任したCarol Christ学長は「学生の成長」を優先課題の一つとしてかかげた。14の学部（colleges & schools）のうち8学部が学士課程を持つUCバークレーでは、学部によって学位に至るまでの道筋は多様で、統一的な学生の成長のためのコンセプトをかかげることは容易ではない。

こうした状況のもとで、2017年から教学部門を統括するOffice of Executive Vice Chancellor and Provost、全学的学士課程教育を担うDivision of Undergraduate Education、IRと企画組織であるOffice of Planning & Analysisが中心となってディスカバリー・ラーニングを全学的コンセプトとするための全学調査が実施されることとなった。

4.3 ディスカバリー・ラーニング全学調査結果

全学調査の結果は、20018年8月に*The Arc of Discovery in the Undergraduate Curriculum*と題する報告書に纏められた。この調査で明らかとなった結果の中で、特に注目すべき点は以下の3点である。

第一に、学士課程の各メジャーの中において、ディスカバリー・ラーニングの諸要素がどのように広がりと深さを持って分布しているかが確認されたことである（図１）。

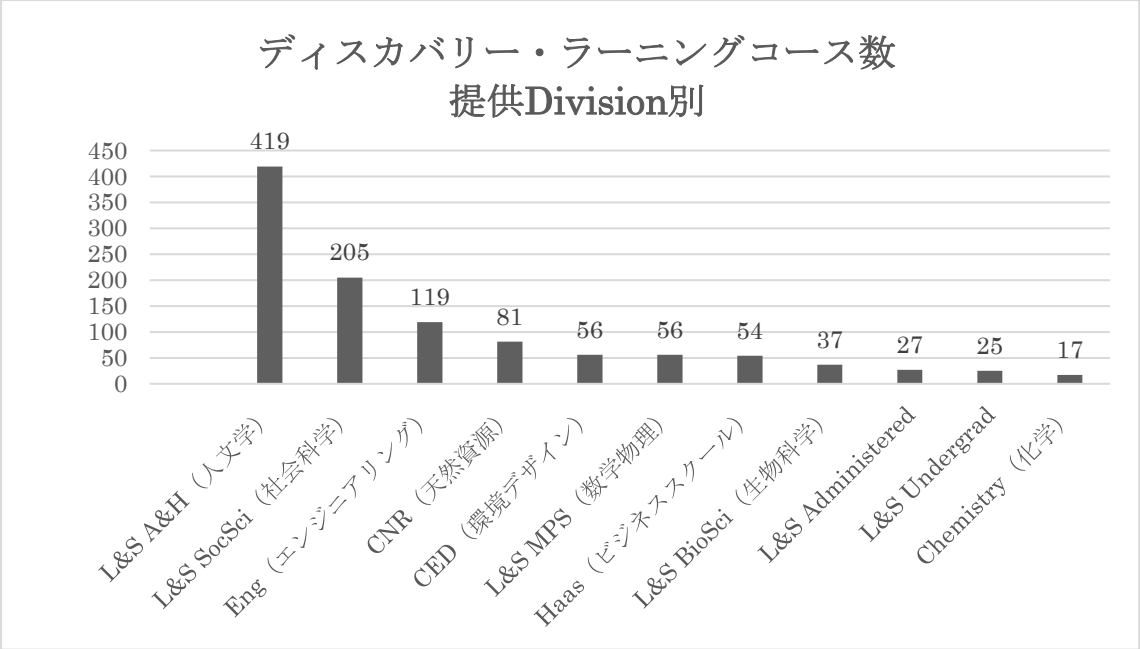

図1　ディスカバリー・ラーニングコース数（提供ディビジョン別）

注：L&S Administered：School of Law, School of Public Health, School of Social Welfare提供のコースを含む。

L&S Undergraduate：American Studies, Interdisciplinary Studies, Media Studies提供のコースを含む。

出典：UCバークレー2018年報告書　*The Arc of Discovery in the Undergraduate Curriculum*　から筆者作成

人文学に最も多く分布し、次いで社会科学、エンジニアリング、天然資源、環境デザイン、数学物理、ビジネススクールの順で多く分布する。それぞれのディビジョンが提供しているコース総数に占めるディスカバリー・コースの比率で比較すると、ビジネススクール（70%）、環境デザイン（56%）、天然資源（33%）、エンジニアリング（32%）、人文学（32%）、数学物理（28%）の順で高く分布している。

第二に、各専攻の上級レベルのコースでは、ディスカバリー・ラーニングの提供が限られていることである。この最も大きな理由は専攻する学生数の多いメジャーでは、教員の数が少なく最高の経験やメンタリングを学生一人一人に十分に提供できないためである。

第三に、こういった困難な所与の条件の中ではあるものの、ディスカバリー・ラーニングを促進するために教授陣はそれぞれのコースで様々な教育方法上の特色ある工夫を試みていることである。例えば手作りの活動やプロジェクト、現実世界の解決すべき問題への果敢な取り組み、専門分野での未解決の問題に敢えて取り組ませるといった工夫である。

次に、学生の学位取得の観点から、ディスカバリー・コースと認定されたコースが、学生の履修要件の中のどこに位置するかを示した結果が図２である。

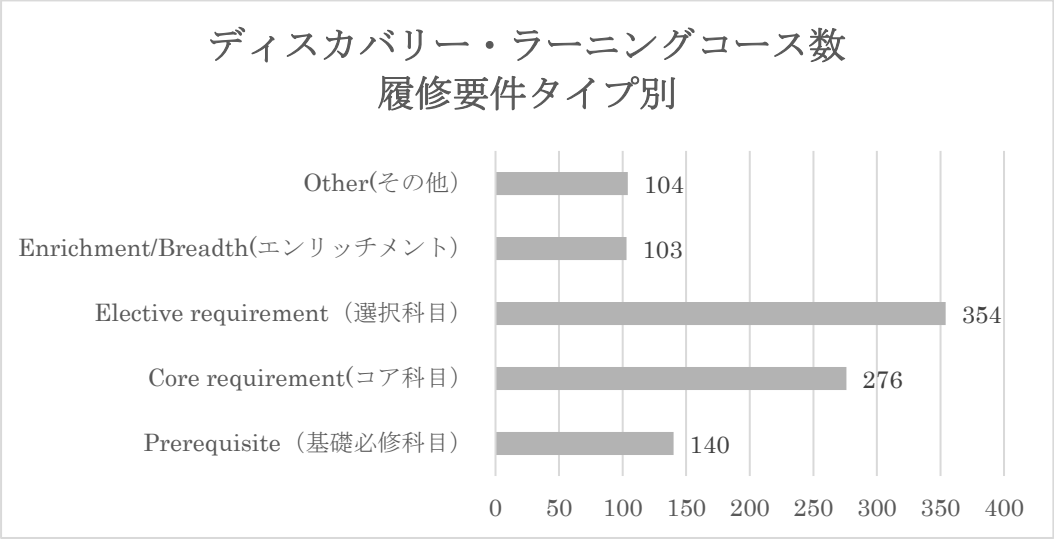

図2　ディスカバリー・ラーニングコース数（履修要件タイプ別）

注：履修要件タイプ別が不明の回答を含むため、合計は、図1の提供ディビジョン別の合計と一致しない。

出典：図1に同じ

ディスカバリー・ラーニングの定義に合致するコースは、全学的な幅広さと深さを意識したエンリッチメントに加えて、通常の選択科目とコア科目としても広く分布した。ディスカバリー・ラーニングとして選ばれた類型は、学士課程研究（Research）が68%、創造的発表（Creative work）が23%、地域・フィールド参画（Community engagement/field studies）が17%、アントレプレナー(Entrepreneurial)が5%であった。複数回答したものもあるため合計は100を超える。Researchが最も多く、その他の類型を大きく上回る。

4.4 Co-curricular（正課併行）タイプのディスカバリー・ラーニング

Co-curricular（正課併行）タイプのディスカバリー・ラーニングは、通常のコースワークよりも学生にとって発見学修の機会となることが多い。これらには学士課程において教員と行う本格的研究活動（Research/Faculty lab）、フィールドトリップ（Field trips/courses）、独立研究（Independent study）、下級生他への学修指導（Peer teaching/tutoring）等を含む。更に海外留学（Study Abroad）も発見学修に含まれている。例えば南アジア・東南アジア研究では「学生が学ぶ言語、文化、文学、宗教、歴史の母国である諸国に滞在して体験学修することは、学生の言語技能を向上させると同時に、当該文化にどっぷりと浸る機会を与え、学修したことを個人的人生体験として内実化する」としている。キャンパス外でのディスカバリー・ラーニングには、インターンシップを含めるものも相当数に昇った。例えば言語学では、言語学エンリッチメント体験（Linguistic Enrichment Experience）というプログラムがあり、デパートメントがその体験学修に対してDiplomaを与える。

5. UCバークレーのピア・グループ校での同様の動き

5.1 UC バークレーの標準的ピア・グループ

ディスカバリー・ラーニングを全学的な統一コンセプトとして全学調査を実施した背景には、4.2で述べたUCバークレーの固有の事情に加えて、UCバークレーのライバル校でありかつ比較対象グループでもあるピア・グループの新しい動向があると考えられる。ライバル校では、どのようなディスカバリー・ラーニング的な特色ある試みが行われているのであろうか。

UCバークレーでは、学内諸活動をライバル校と比較する際に用いる標準的ピア・グループ（UC Berkeley's　Standard Peer Comparison Group）を持っている。私立5大学と州立5大学で構成[4]される。この10大学とUCバークレーの学士課程学生数（横軸）と大学院生数（縦軸）を図3に示す。

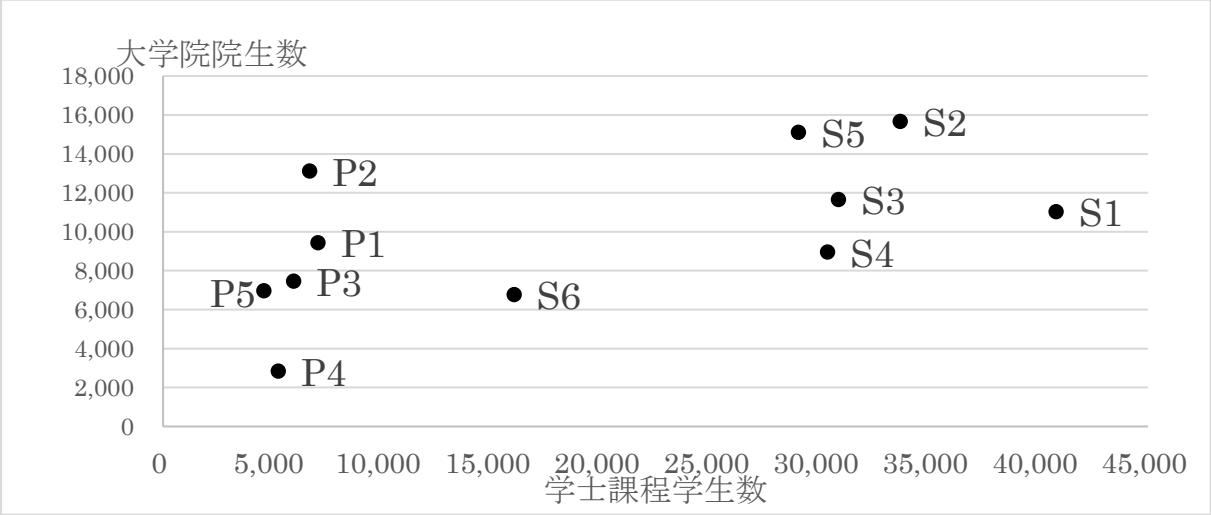

図3　UCバークレーと標準ピア・グループ10校の学士課程学生数と大学院生数（2018年）

P:私立大学　P1 スタンフォード　P2 ハーバード　P3 イェール　P4 プリンストン
P5　マサチューセッツ工科

S:州立大学　S1 テキサス州立　S2　イリノイ　**S3 UCバークレー**　S4 ウイスコンシン
S5 ミシガン　S6　バージニア

出典：各大学のファクトブック等

私立研究大学（図3P1～P5）の学士課程学生数は4千人から7千人に分布しているのに対し、州立大学（同S1～S6）では、バージニア大学（S6）の1万6千名を例外として3万人から4万人の間に分布している。州立大学はUCバークレー（約3万人）と同様、学士課程学生数が多いことが共通の特徴である。私立研究大学はリベラルアーツ・カレッジ（通常2千人前後の学士課程学生数）に近い少人数指導も行える余地が州立大学よりは大きいが、州立大学はこの点では一般に工夫の必要がある。

こうした観点を踏まえた上で、ピア・グループの各大学で最近行われている学士課程教育の特色ある試みの中で、ディスカバリー・ラーニング的な動きを分析することは、今後の示唆を得るうえでも有益であると考えられる。次項に示した各大学のディスカバリー・ラーニング的な動きは、各大学が、

受験生を含む外部に対して公表している学士課程教育での特色の中から、2019年5月から11月の6か月間に筆者が選択したものである。

5.2 ピア・グループでの同様の動き

スタンフォード大学（P1）

スタンフォード大学には、学士課程学生向けに3つの特別フォーカスプログラムがある[5]。第一は1年生がスタンフォードに早くなじむためのアドバイジング（EAP：Expanded Advising Program）[6]、第二は広い専攻をまたがる学際的観点から学生と教員との対話を可能にするコース（ESF：Education as Self Fashioning）、第三は学生のlife's core questionsの探究を助ける新しいモデル（Lifeworks）である。アドバイジングと新しい試みの探求機会に力点を置いていることがスタンフォードの特徴である。

ハーバード大学（P2）

ハーバード大学の学士課程には、伝統的な教室での履修に加えて新しいタイプのプログラムで単位を取得できるエンリッチメント・プログラムがある。Independent StudyとStudy Abroadである。前者は自ら研究をデザインする独立性の強いプログラムで、後者は海外で新しい文化・言語に出会い、忘れがたい経験をするプログラムである。

これらの研究を支援する組織として学士課程研究フェローシップオフィス（URAF：Office of Undergraduate Research and Fellowships）がある。URAFは、独自の研究プロジェクトを主宰すると同時に研究機会のデータベースとfundingソースを持つ。ハーバードの学士課程研究の特色の一つとして、研究機会と資金源が豊富であることにより、希望に沿ったハイレベルな研究が出来る可能性が高いとう点をあげることができる。

イェール大学（P3）

イェール大学の公式ホームページでは、学士課程での学生生活は教室外の活動にこそ豊かさがあるとして100のスポーツ活動、50のパフォーマンスグループ、60の文化活動の存在を強調している。これはイェールの歴史と伝統を反映したものと考えられる。

また学士課程のウェブサイトのUndergraduate Studyでは、通常のカリキュラムに加えて、学士課程研究、国際的経験の機会が強調されている。またライティングや科学研究等の特別プログラムの中から学生は自由に選択することができる。

プリンストン大学（P4）

プリンストン大学は、学士課程教育における少人数教育に特色がある。ビジネススクール，ロースクールを持たず、大学院生数は今回ピアー・グループの比較対象大学の中では最も少ない。学士課程学生のプリンストンにおける経験の特色は、各専攻分野でリーダー的地位にある教授陣と密接な関係を保つことが出来る点にある。学修の創造性、イノベーション、リベラルアーツ科目とのコラボレーションが、カリキュラムの特色として強調されている。学士課程学生は、多くの分野を探求することができ、また特定の分野に集中して深く探求することができる。

マサチューセッツ工科大学（P5）

マサチューセッツ工科大学の学士課程教育の実験的学修の一つに、学士課程研究機会プログラム（Undergraduate Research Opportunities Program）がある。学士課程学生は、このプログラムで既存の研究プロジェクトに参加することもできるが、学生自身のテーマを探求することもできる。学士課程学生が教授陣とパートナシップを育む機会を持つ仕組みである。

このプログラムの効果としてあげられているのは、学士課程学生と教授、研究者、大学院生、他の学生とのコネクションの形成、メジャー、マイナーの探究、もう一つの異なる分野の探究、大学院進学他の将来のキャリアのための知識と技術の習得である。

テキサス州立大学（S1）

テキサス州立大学の学士課程教育において最もディスカバリー・ラーニング的な取り組みの一つにオナーズコース（Honors Courses）がある。これは優秀な成績で高い学修意欲を持つ学生向けのコース群である。学内に従来からある伝統的なオナーズ・カレッジ（Honors College）では、優等学位に向けたコースが設けられている。

専門分野ごとのオナーズコース（Departmental Honors Courses）は、オナーズ・カレッジ以外に設けられた同様のコースである。約20名の選ばれた学生が、オナーズ・カレッジと同様の探究的で水準の高い授業を受けることができる。海外留学オナーズコース（Study Abroad Honors Courses）では、海外で学ぶプログラムの中にオナーズコースが位置づけられている。学士課程学生が自らデザインするオナーズコース（Student-designed Honors Courses）では、学士課程学生が自らのトピックスを独立研究として単位化することができる。

イリノイ大学（S2）

イリノイ大学にはFreshman Honors Experienceという制度があり、学士課程の1年生で特定の優等奨学金に認められると、知的な冒険やプロフェッショナルな成長の機会が与えられる。3年生、4年生向けにHonors Societiesのメンバーシップに挑戦する機会が与えられる。Tau Beta Pi(Engineering)、Beta Gamma Sigma(Business)、Kappa Delta Pi(Education)等のメンバーに認められると様々な体験が用意されている。

UCバークレー（S3）

UCバークレーでは、ディスカバリー・ラーニングを全学的な統一的コンセプトとする方向で2018年に学士課程調査を実施したことは既に述べた。これ以前にも学士課程エンリッチメント・プログラムとして、新入生を迎える全学が1冊の本を共通話題としてとりあげる試み（On the Same Page）や、学士課程学生の配分必修履修の中に最も卓越した教員による発見学修コース（Discovery courses）が毎年20程用意される等の全学的取り組みがなされて来た。更に二つかそれ以上の学科からの卓越した教員により共同で教えられるコース（Big idea courses）等も試行されて来た。また学士課程学生向けの様々な機能別アドバイジングの充実が図られている。

ウイスコンシン大学（S4）

ウイスコンシン大学では、研究、国際プログラム、インターンシップを始めとする教室内外の機会を通じて、その体験が学生の世界を見る目を養い、学生に貴重なインパクトを与える機会が多い点を学修のアウトカムとして強調している。

全学で革新的なアイデアを競うイノベーションコンテストが実施されている。運営組織は工学部で立ち上げられたが、キャンパス全体から参加者がある。優勝チームへの賞金の他に学生主導の多くのグループにシードマネーが与えられる。

ミシガン大学（S5）

ミシガン大学では、21世紀の研究大学における将来の州立大学での教育education）を再定義し、学修の未来形を探るためのファンドが設けられた。審査の基準は、革新の度合すなわちイノベーション度である。また多様性、公平性、キャンパスの一体感等他のイニシアティブとの連携も審査の観点とされる。

バージニア大学（S6）

バージニア大学では、UNLEASH（Undergraduate Novel Learning Experience and Scientific Hands-on）という学士課程研究推進の新しい仕組みが設けられている。学士課程学生と研究テーマでメンターとなる教員とをマッチングする。学生は研究室の研究ボランティアとなるかあるいはコースワークの一部として研究に参加する。後者の場合は、学士課程プログラムを専門とするアドバイザーのコンサルテーションを必ず受けなければならない。

以上の11大学の事例を整理したものが表1である。

表1　UC Berkeleyと標準的ピア・グループ10校のディスカバリー・ラーニング的要素

	P1	P2	P3	P4	P5	S1	S2	S3	S4	S5	S6
学士課程研究	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
創造的発表			○	○				○			
地域・フィールド参画		○				○	○	○	○		
アントレプレナー	○			○	○		○	○	○	○	○
オナーズプログラム						○	○				

出典　各大学の事例から筆者集計

6. おわりに

6.1 まとめ

本稿では、2018 年 8 月に公表された UC バークレーの全学的調査“*The Arc of Discovery in the Undergraduate Curriculum*”を主たる資料としてディスカバリー・ラーニングを分析し、更にピア・グル

ープ校での同様の動きを検討してきた。2004 年から UC バークレーで順次導入されて来たアカデミック・エンリッチメント・プログラムと比較すれば、学生の個々の興味に基づく学修上の体験やイノベーション志向に特色がある。大西（2018）も指摘しているが、カリフォルニア大学バークレー校のリベラル教育は、少人数教育が徹底されない現実とのギャップに悩んだ結果、より効率的で現代的な内容のカリキュラムに刷新・脱皮するための大きな改革の途上にあることが本稿でも確認された。3 万人を超える学士課程学生に機能別アドバイジングを行う体制を強化する一方で、発見学修を学内統一コンセプトで推進することは容易ではない。他方、州立大学と比較して学士課程学生数が少ない私立研究大学では、より活発に発見学修の機会を与える取り組みが可能である。

最後に学士課程教育の今後の改革に向けての示唆について述べる。学士課程研究、創造的発表、地域・フィールド参画、アントレプレナー（起業、研究の商業化）は、これからの学士課程教育に重要な要素であり、今後は重要性が一段と高まるものと考えられる。またオナーズ・カレッジのような取り組みは、既に日本でも試みられているが、更に多くの大学で検討の余地があると考えられる。

注

[1] この引用部分は、1989 年に出された翻訳書も参考にしているが、原書（Bok,1986, 54-55）を現在の視点からあらためて翻訳したものである。

[2] エートスの英語文は ethos である。この文脈では「理念と行動に裏打ちされた気風、精神」というようなニュアンスであろう。

[3] アメリカのリベラルアーツ・カレッジは、通常学士課程学生数が 2 千名未満で、大学院をもたないかあっても小規模である。また教員 1 人当たりの学生数が 7 対 1 あるは 8 対 1 前後である。財務的には学生 1 人当たりの基本財産の大きさにも特色がある。財務面も含めたリベラルアーツ・カレッジの学士課程教育については、Breneman（1994），長野（2019）に詳しい。

[4] 10 校に UC のロスアンゼルス校とサンディエゴ校を含めた 12 校を標準比較グループとしているが、本稿では他大学の 10 大学を比較検討対象とする。

[5] スタンフォード病院で、学士課程学生向けに探求の機会を提供する SIMS: Stanford Immersion in Medicine Series を加えると特別フォーカスプログラムは 4 つから構成される。

[6] 筆者が 2019 年 7 月に UC バークレーを訪れた際に面談したアドバイジングのシニアコンサルタント Elizabeth Wilcox によれば、「つい先日スタンフォード大学に招かれて UC バークレーのアドバイジングの経験をベースに講演をした。スタンフォード大学でも最近アドバイジングに特に力を入れている」とのことであった。UC バークレーとスタンフォードで特にアドバイジングが強調されているのは、学士課程学生の多様性が大きいことと学内競争が激しいことの反映と考えられる。

引用文献

江原武一（2006）「アメリカの学部教育の現状」『立命館高等教育研究』第6号, 59-70.

大西好宣（2018）「米4大学におけるリベラルアーツ教育の現状と改革」『JAILA JOULNAL』第4号, 14-25.

絹川正吉 (2005) 「リベラルアーツ教育と学士学位プログラム」日本高等教育学会編『高等教育研究』第8集, 7-27.

清水栄子（2015）『アカデミック・アドバイジング』東京: 東信堂

長野公則（2019）『アメリカの大学の豊かさと強さのメカニズム：基本財産（エンダウメント）の歴史、運用と教育へのインパクト』東京: 東信堂

福留東土（2013）「アメリカの大学における内部質保証ーカリフォルニア大学のプログラムレビューを通してー」『ＫＳＵ高等教育研究』第2号, 33-45.

ボック, D. C. (1989)『ハーバード大学の戦略』（高橋靖直, 小原芳明, 田中義郎（訳））東京: 玉川大学出版部（原著1986版）

吉田文 (2005)「アメリカの学士課程カリキュラムの構造と機能—日本との比較分析の視点から—」日本高等教育学会編『高等教育研究』第8集, 71-93.

Blaich, C., Bost, A., Chan, E., and Lynch, R. (2004, February 23). Executive summary: Defining liberal arts education [Web page]. Retrieved from https://www.wabash.edu/news/displaystory.cfm?news_ID=1400

Bok, D.C. (1986) *Higher learning*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.

Breneman, D. W. (1994). *Liberal arts colleges: Thriving, surviving, or endangered.* Washington D.C.: The Brookings Institution.

Hartley, S. (2017). *The fuzzy and the techie: Why the liberal arts will rule the digital world.* Boston: Houghton Mifflin Harcourt.

Rothblatt, S. (2016). Old wine in new bottles, or new wine in old bottles? The humanities and liberal education in today's universities. In G. Hunter & F. G. Mohamed (Eds.), *A new deal for the humanities: Liberal arts and the future of public higher education* (pp. 31-50). New Brunswick: Rutgers University Press.

Tim C. (2018, September). The promise of the experimental liberal arts. *Chronicle of Higher Education*. Retrieved from https://www.chronicle.com/article/The-Promise-of-the/244419

ウェブサイト

P1　スタンフォード大学　https://undergrad.stanfosd.edu/programs

P2　ハーバード大学 https://college.harvard.edu/academics

P3　イェール大学 https://www.yale.edu/academics

P4　プリンストン大学 https:www.princeton.edu/academics

P5　マサチューセッツ工科大学 http://uaap.mit.edu

S1　テキサス州立大学 https://www.txstate.edu

S2　イリノイ大学 https://illinois.edu/academics

S3　UC バークレー http://www.bekeley.edu

S4　ウイスコンシン大学 https://www.engr.wisc.edu

S5　ミシガン大学 https://ai.umich.edu

S6　バージニア大学 http://uvaurn.org/unleash